

紀要

31

- 前期土偶の根本的性質と展開過程 ……………瀬口 眞司 (1)
- 近江の埴輪棺墓と地域間交流 ……………宮村 誠二 (15)
- 県内出土の木製人形代について ……………中村 智孝 (23)
- 古代中世の規格流通材「へぎ板」を考える ……………横田 洋三 (31)
- 将棋史研究ノート9
 —飛車と角行の登場— ……………三宅 弘 (38)
- 北朝期・室町期の近江における京極氏権力の形成…北村 圭弘 (47)

紀 要

第 31 号

平成 30 年（2018 年）3 月

公益財団法人滋賀県文化財保護協会

将棋史研究ノート9

—飛車と角行の登場—

三宅 弘

1. はじめに

将棋の歴史において、飛車と角行は後発の駒である。最古の将棋駒が発見された興福寺旧境内遺跡においては、玉将以下、金将、銀将、桂馬、そして歩兵の5種類の駒が出土しているが(清水1994)、これらの駒は現在使用されている将棋(現将棋、以下同様に呼称する)の駒と同じものである。また、天喜6年(1058年)と書かれた木簡と共伴して「酔像・金将・歩兵」「歩兵」と書かれた墨書木札が出土していたが、中將棋の駒であると考えられていた酔象駒の存在はあまり考慮されてこなかった。

ところが、2013年に同じ興福寺旧境内遺跡から今度は桂馬と共に酔象の駒が出土した(日本経済新聞ほか2013)。この駒は、承德2年(1098年)銘の木簡と共伴しており、最古の駒から40年の後には紛れもない酔象の駒が存在したことになる。伝来初期の日本の将棋(大将棋、小将棋を総称して平安将棋と呼ぶ、以下同様に呼称する)が現将棋から飛車、角行を抜いた盤面9×9マス、総駒数36枚の形態であったであろうという以外に、酔象を含めた盤面9×9マス、総駒数38枚の形態の将棋の存在が確実視されるようになった(古作2014)。すなわち、初期の将棋として、少なくとも平安小将棋、平安大将棋(盤面13×13マス、総駒数68枚)、酔象を含んだ平安小将棋の3種類が見られたということになる。それらの将棋には飛車や角行という名称の駒は存在しない。

また、現在、諸外国で遊ばれていたと考えられる「将棋」(チャトランガ・マックルック・象棋・チェスなど諸外国で遊ばれている将棋を総称して仮にこう表現しておく)に比べると、平安将棋は駒の機能が縮小され動きの小さなものになっているのも事実である⁽¹⁾。盤の大きさ(マス目の数)にさほど変わりがないのに、なぜ日本の将棋のみが機能の縮小された駒で遊ばれるようになったのであろうか。

また、飛車や角行はいつ、どのような形で誕生したのだろうか。現在のところ、鎌倉時代後期頃に誕生したと考えられている大将棋(鎌倉時代に登場したと言われる中世の大将棋、以下同じ。盤面15×15マス、総駒数130枚の将棋)には飛車や角行の駒が存在する⁽²⁾。では、大将棋以前の将棋には飛車や角行の元となった駒が存在するのだろうか？

2. 飛車、角行が使われた将棋

はじめに述べたように、飛車、角行が登場したのは大将棋からであり、その時期は鎌倉時代後期頃と言われている。古文書等では、永仁5年～正安4年(1297～1302)頃に

僧良季によって著わされた僧侶の演説用の模範文例集である『普通唱導集』が初出となる(村山2006)。これには小将棋と大将棋についての記載があるが、大将棋の駒には平安時代の将棋には見られない反車、飛車、仲人、噴猪などの駒名が記されている⁽³⁾。

『普通唱導集』に著わされた大将棋は、平安大将棋と区別して「鎌倉大将棋」(上記の大将棋)とも言われている。この大将棋には上記の飛車の他に角行も記されており、成りは今の飛車、角行と同じ龍王、龍馬である。古典史料を検索すれば、少なくとも鎌倉時代後期までには大将棋が成立していたものと考えられる。

それ以前の将棋は、平安時代の日記等に書かれているように(増補史料大成刊行会編1965・1992)、大将棋(平安大将棋)と将棋(平安小将棋)の2種類が遊ばれていたと記録されている⁽⁴⁾。将棋は駒の種類6種、総駒数36枚のもので、現将棋と比べると飛車と角行が欠落している以外は名前も駒の動きも敵陣に入って成るときもすべて同じである。

平安大将棋では平安小将棋と重なる駒については動きも成りも同じである。それ以外の駒は銅将・鉄将・横行・猛虎・飛龍・奔車・注人が存在しそれぞれ得意な動きを与えられているが、銅将以外は成ることが出来ない。因みに、銅将は成ると金将となり金将の動きに代わる。

大将棋は前述したように、駒の種類29種、総駒数130枚の大掛かりなもので、動きも成りも複雑になるばかりではなく、酔象駒が登場する。この駒は、玉将(王将)が取られても敵陣に入って成ると太子になり、ゲームが続行できるという特別な駒である。つまり、「王」に変わる跡継ぎであり、この駒ができたことで1ゲームの消費時間が増加されることになるが、ゲーム自体の簡潔性については逆の効果をもたらしたとも考えられる。

因みに、駒の種類を増やし、動きを複雑にしてなおかつ容易に終わらないような仕組みを施している大将棋は、登場後ほどなく行き詰まりを見せ始めたのではないか⁽⁵⁾。従ってその後すぐに駒の種類21種、総駒数92枚の中將棋に置き換わったと考えられる。

では、飛車、角行が登場したと考えられる大将棋以前の平安大将棋に飛車、角行誕生の嚆矢となる駒の存在はないのだろうか。

3. 駒の名称と動き

飛車、角行という駒の名前や動きはそれまでの平安将棋の駒と比べて特異な駒であらうか。伝来将棋(日本に伝え

られた当初の外国の将棋、以下同じ)には「車」と呼称される駒が存在する⁽⁶⁾。その名称を2文字の後半部分に付けた「○車」が、日本将棋の駒の名称付与における特徴の一つになったことは言を俟たない。従って、飛車の登場には「○車」という名の駒が既に存在しており、それらの名称および動きを変更したと考えるのが普通である。また、角行は伝来将棋の中に「行」という名称を与えることが出来る駒が存在しておらず、独自の命名であると言える。平安小将棋には「○行」という名称が見当たらないものの、平安大将棋には「横行」という名の駒が存在し、それらから角行の名が誕生したと考えられる。

(1) 飛車登場以前の「車」がつく駒と縦横に動く駒

平安時代の日本将棋誕生の参考として諸外国の「将棋」の状況を見ると、飛車の名称の起源として伝来将棋の「車」がある。この駒は飛車と同じ動きをしている。平安小将棋では、「車」から創作されたと考えられる香車が存在するが、機能は1/2(もしくは1/4)である(三宅弘2016)。平安大将棋には奔車が存在し、この駒は前後にどこまでも動けるものの、左右には動くことが出来ない。動きは「車」の1/2である。

前後左右に動くことが出来る「車」の駒が日本に伝えられて香車になったときに、機能が縮小された理由は盤面9×9マス、総駒数36枚の狭い盤面の将棋では、大きく動く駒は敵の玉将(王将)をすぐに追い詰め、勝負そのものが早く終わってしまう。従って、ゲームとしての面白みの少ないものになってしまうのを回避した結果だと考えられてきた。(増川1977)しかし、諸外国の「将棋」についても、伝来将棋から大きな変化がなかったと仮定するならば、盤面の大きさ(マス目の数)や駒数については平安小将棋と形態的に大きな差異は認められない。従って、駒の機能が縮小された理由が見いだせない⁽⁷⁾。古作氏はその理由を「平安将棋が作られた時点で玉を最高の駒にするため…(中略)…意図的にそれまでの各国の将棋系ゲームの主役である車や馬にあたる駒の働きを弱めた」(古作2015)と考えている。

ほぼ同じころにできたとされる平安大将棋には、前後あるいは左右だけに動くことのできる駒(奔車、横行)は存在している。つまり、「車」はその機能が分割されたのである。因みに、横行は左右には自由に動くことが出来るものの、前には1マスのみ進むことが出来るだけで後ろへは戻れない。従って、主に玉将の上部を守る駒であると考えられる。

(2) 角行登場以前の「行」が付く駒と斜めに動く駒

伝来将棋には「行」と呼称する駒は存在していない。駒の名称としては日本独自のものである。この名称は、駒の動きを表したものであると考えられる。平安小将棋には、「○行」と呼称する駒は存在していないが、平安大将棋に

は横行が存在する。横行は名前の通りに左右にどこまでも動くことが出来るとともに前方に1マス動ける。名称から推測すると、角行の元になった駒であろうと考えられるが、機能については第1節で述べたように、「車」が分割された動きを担っている。

では、角行の機能の元になった駒は存在しないのであろうか。平安大将棋には、飛龍と呼ばれる駒があり、この駒は角行と同じく斜めにどこまでも動くことのできる駒である。斜めにどこまでも動くことのできる駒は、伝来将棋には見当たらない。ただ、現行の「将棋」には斜めに1マス動くことのできる駒が存在する。現将棋の金将に相当する駒で、インド(マントリ)、タイ(メット)などである。また、中国の銀将に相当する駒(相・象)は斜めに2マスまで動くことが出来る。

4. 出土遺物から見る飛車、角行(17世紀初頭以前)

ここでは、各地の遺跡から出土する飛車、角行の駒を取り上げて紹介する。紙数の都合上、出土数の増加する江戸時代(17世紀)以降の駒は割愛する。また、16世紀から17世紀にまたがる可能性のある駒については、16世紀に遡る可能性のある駒として紹介する。(各遺跡の頭番号は、文末の文献番号に対応している。)

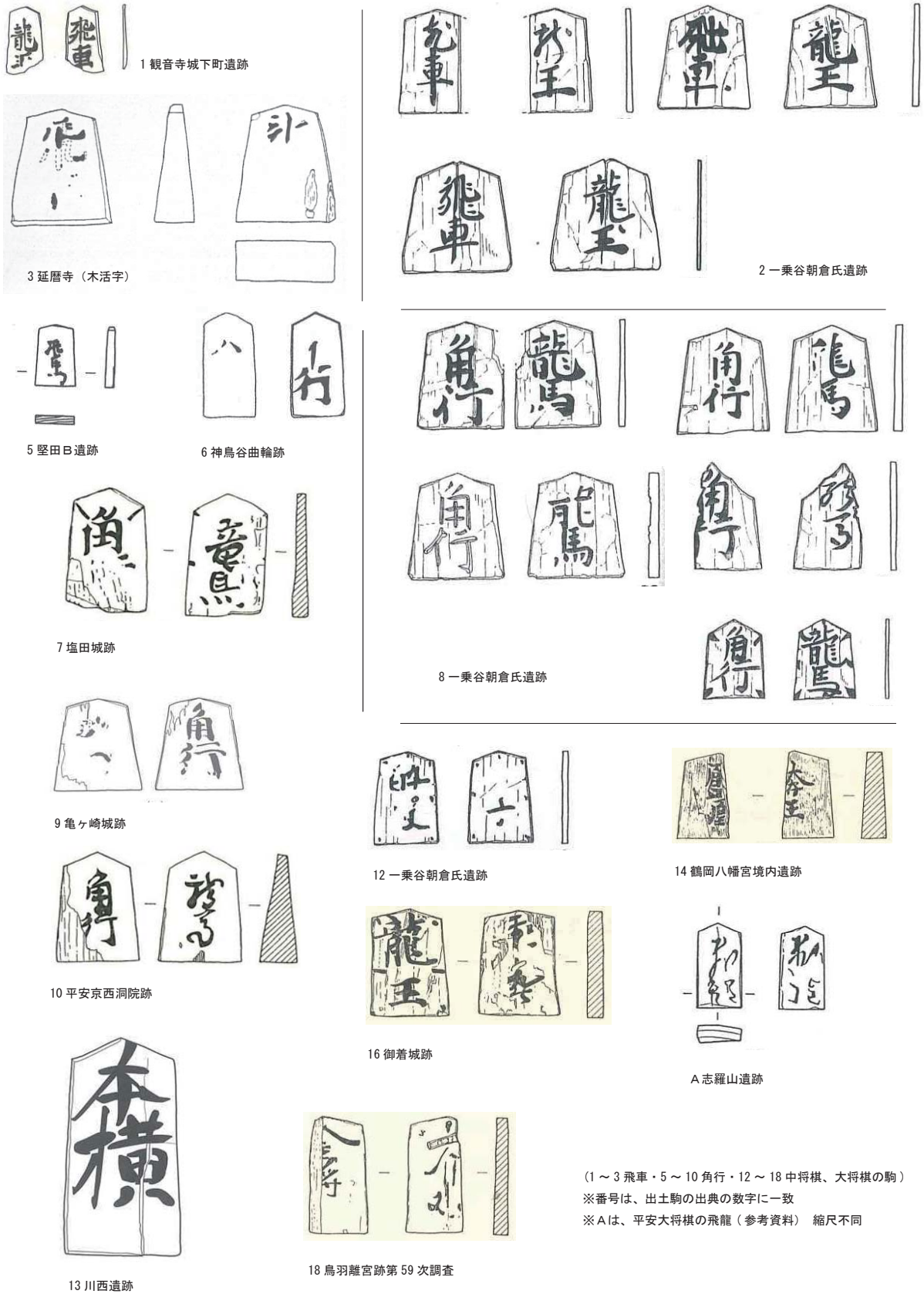
◆飛車

- 1 滋賀県 観音寺城下町遺跡(16世紀中頃) 他の駒から推測して、小将棋の駒である。
- 2 福井県 一乗谷朝倉氏館跡(1567年以前) 飛車が7枚出土している。全て小将棋の駒である。この他、酔象も出土している(後出)。
- 3 滋賀県 延暦寺(16世紀後半～17世紀前半) 木活字に転用
- 4 大阪府 大坂城跡(16世紀末～17世紀初頭) 文字は黒漆で書かれている。

◆角行

- 5 石川県 堅田B遺跡(13世紀中頃～後葉) 片面は「龍馬」大将棋もしくは中将棋の駒(角行→裏は龍馬、龍馬→裏は角鷹)か?もう片面は文字不明。
- 6 栃木県 神鳥谷曲輪跡(14世紀頃) 裏面は不明。
- 7 長野県 塩田城跡(16世紀前半頃) 駒の進む向きに印がつけられている。
- 8 福井県 一乗谷朝倉氏館跡(1567年以前) 角行12枚出土。
- 9 山形県 亀ヶ崎城跡(16世紀前半～17世紀初頭)
- 10 京都府 平安京西洞院跡(16世紀末～17世紀初頭)

駒の動きから考えられることは、角行の登場以前に斜めに大きく動く駒が存在していたこと、飛車の登場以前には



(1~3 飛車・5~10 角行・12~18 中将棋、大将棋の駒)
 ※番号は、出土駒の出典の数字に一致
 ※Aは、平安大将棋の飛龍(参考資料) 縮尺不同

図1 遺跡から出土した将棋駒

遺 跡 名	所在地	時 期	出土駒の種類				合 計	備 考
			飛車		角行			
			表面	裏面	表面	裏面		
			飛車	龍王	角行	龍馬		
堅田B	石川県	13c中頃～後葉			?	1	1	中将棋もしくは大将棋の駒。角行・龍馬か龍馬・角鷹か
神鳥谷曲輪	栃木県	14c			1	?	1	
塩田城	長野県	16c前半頃			1	?	1	駒の進む向きに印がある。
観音寺城下町	滋賀県	16c中頃	1	○			1	
一乗谷朝倉氏館	福井県	1567年下限	7	○	12	○	19	
赤堀城	三重県	1584年以前(15～16c)	1	?			1	
亀ヶ崎城	山形県	16c前半～17世紀初頭			1	○	1	
延暦寺	滋賀県	16c後半～17c前半	1	?			1	木活字転用駒
平安京西洞院	京都府	16c末～17c初			1	?	1	
大坂城	大阪府	16c末～17c初	1	○			1	黒漆・水無瀬駒か
港区愛宕下 No.149	東京都	寛永9年(1632年)頃	1	○			1	
木ノ新保	石川県	17c初頭～後半以前			1	○	1	
岡山城二の丸 (中国電力変電所)	岡山県	17c前半			1	○	1	
築地五丁目	東京都	17c中頃下限			1	○	1	
福井城跡	福井県	1640年前後	1	○			1	裏は「竜王」
大坂城	大阪府	18c中頃			2	?	2	
黒崎城(七区)	福岡県	18c後半			2	?	2	角行1点は長方形を呈する。もう1点は馬の1文字
高槻城三ノ丸	大阪府	18c末～19c初	3	○	2	○	5	飛車は漆書
隼上り	京都府	19c頃			1	○	1	伊万里焼製
甲府城下町(1)	山梨県	19c後半頃			1	○	1	
池之端七軒町	東京都	江戸	1	○	1	○	2	
青木原	静岡県	近世・近代	1	○			1	
旧大乗院庭園	奈良県	明治(日清・日露戦争期)	1		2		3	軍人(行軍)将棋の駒に作り替えている
合 計			19		30	1	50	

?未確認 ○確認

表 1 飛車・角行の出土遺跡

縦横に動く駒は存在していないものの、縦・横いずれか一方の動きをする駒は存在していたことが判った。飛車と同じ動きをする駒は、インド・タイ・中国・朝鮮などの「将棋」に見られる「車」にあたる駒であるのに対して、角行と同じ動きをする駒は、平安大将棋の飛龍を除くとチェスのビショップ以外に見当たらない⁽⁸⁾。

堅田B遺跡例が13世紀頃とやや年代的に早く感じるものの、大将棋の記述が永仁5年～正安4年(1297年～1302年)に書かれた『普通唱導集』(村山2006)以前と考えられることから、13世紀に登場していたことは間違いないものと考えられる。

5. 中将棋・大将棋にかかわる出土駒

ここでは中将棋、大将棋の駒について述べる。それらには、金将の裏に飛車、表面に龍王、龍馬の駒が存在しているため、出土駒が片面しか確認できない場合には、どの将棋の駒であるのかの特定が困難になる。従って、飛車、角行の登場を考える上では、中将棋や大将棋の駒の出土状況を確認しておいた方がいいと考える。

◆酔象

11奈良県 興福寺旧境内跡(1098年) 井戸跡出土(酔象を含んだ平安小将棋もしくは中将棋・大将棋か)

12福井県 一乗谷朝倉氏館跡(1567年以前) 朝倉義景館の堀出土

◆本横(奔王)

13徳島県 川西遺跡(13世紀頃) 中将棋もしくは大将棋か

◆鳳凰

14神奈川県 鶴岡八幡宮(鎌倉時代末期) 中将棋もしくは大将棋か

◆龍王

15静岡県 小川城跡(15世紀後半～16世紀前半) 裏面に「飛龍」とあるが、竜王の裏は飛鷲である。駒の動き先を明示している。

16兵庫県 御着城跡(1571年下限) 他面は不明。

◆盲虎

17静岡県 小川城跡(15世紀後半～16世紀前半) 裏面に「飛鹿」駒の動き先を明示している。

◆金将

18京都府 鳥羽離宮跡第59次調査(鎌倉時代頃か) 裏面は判読不明。「飛」か。

◆銀将

19兵庫県 宮内堀脇遺跡(1554年以降) 裏面は豎行 中将棋・大将棋の駒

◆中兵

20京都府 平安京跡(鎌倉時代後期) 平安京左京八条三坊十四町出土 「中兵」とあるが、その駒はどの将棋にも

出てこない。

出土した駒は、ほとんどが鎌倉時代(13世紀)以降の駒であるが、1点だけ平安時代の(酔象)が出土している。第4章で記述した石川県の堅田B遺跡出土の「龍馬」は、角行の裏面である可能性とともに、表側が龍馬の駒としての可能性も存在する。また、「金将」の裏面が「飛車」であることについても同じで、片面の状況だけでは判断が難しいと考えられる。

6. 世界の将棋駒と古代日本の将棋駒の比較

現在、世界各地で遊ばれている「将棋」は数多く存在するが、日本の平安将棋にかかわりがあると思われる「将棋」とその駒の動きを紹介しておく。特に説明しないが、並べた順に日本の現将棋の「玉将(王将)」、「金将」「銀将」「桂馬」「香車」「歩兵」の6種類に相当する駒である。(太字は現将棋と一致するもの)

◆インド将棋(チャトランガ)との類似駒

「王」(ラージャ) = 「玉将」、 「将」(マントリ) = 「猛虎」、「象」(ハステイ) = 「銀将」、 「馬」(アシュワ) = 八方桂 該当せず、「車」(ラタ) = 「飛車」 古代には該当せず、「兵」(パダチ) = 「歩兵」 但し、敵の駒を取るときには斜めに動く。

◆タイ将棋(マックルック)との類似駒

「君」(クン) = 「玉将」、 「種」(メット) = 「猛虎」、「根」(コーン) = 「銀将」、 「馬」(マー) = 八方桂 該当なし、「船」(ルア) = 「飛車」 古代には該当せず、「貝」(ピア) = 「歩兵」 但し、敵の駒を取るときには斜めに動く。

◆中国将棋(象棋=シャンチー)との類似駒

「師・将」 = 「銅将」、 「仕・士」 = 「猛虎」、「相・象」 = 「角行」の動き大将棋の「飛龍」、 「馬・馮」 = 八方桂 該当なし、「車・俥」 = 「飛車」 古代には該当せず、「兵・卒」 = 「歩兵」。

◆朝鮮将棋(将棋=チャンギ)との類似駒

「漢・楚」 = 「玉将」、 「士」 = 「玉将」、 「象」 = 八方桂 + 斜めに1マス 該当せず、「馬」 = 八方桂 該当なし、「車」 = 「飛車」 古代には該当せず、「兵」 = 左右と前に1マス、該当せず。

「玉将(王将)」に相当する駒は、中国の「帥・将」以外は全て日本と同じ動きをしている。「金将」に相当する駒は、「玉将(王将)」と同じ動きをする朝鮮の「士」以外は、斜め四方へ1マスずつ進むことができる駒である。「銀将」相当の駒はインドの「象(ハステイ)」とタイの「根(コーン)」が日本の銀将と同じ動きをし、中国の「相・象」は角行と、朝鮮の「象」は八方桂(桂馬の動きを四方に広げたもの)に加えて斜めに1マス進むことが出来る。「桂馬」相当の駒は

遺跡名	所在地	時期	出土駒の種類類																備考							
			将象		奔王		鳳凰		龍王		龍馬		盲虎		反車		金将			総将		その他				
			表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面	表面	裏面		表面	裏面	表面	裏面	注	数量	
			太子	将王	-	鳳凰	奔王	龍王	飛鷹	龍馬	角鹿	盲虎	飛鹿	反車	鯨	飛車	金将	飛将		縦将	横将	数量	注	数量	合計	
興福寺日壇内	奈良県	承徳二年(1098年)	1	?																				1	群象駒(裏不明) 承徳二年(1098年)の木簡(題箋軸)が共伴	
志羅山	岩手県	平安末頃(12c)																						1	※1 両面に「飛龍」 平安大将棋の駒か	
聖田B	石川県	13c中頃~後葉																						1	※2 龍馬(裏不明)(角行の裏か) 大将棋の中將棋	
平安京(左京八条三坊十四町)	京都府	鎌倉後期																						1	※3 表面に「中兵」(中兵と裏記される駒は、どの将棋にも見られない)	
川西	徳島県	13c																						1	本棋(正しくは、奔王)(裏はナシ)大将棋か	
鳥羽離宮第59次	京都府	鎌倉頃																						1	裏面に「飛」か	
鶴岡人権宮内 研修遺構用地	神奈川県	鎌倉末期か(19中~15中)																						2	鳳凰(奔王)1、金将は裏が飛車	
本郷元町	東京都	鎌倉~室町	1	?																				1	群象1	
上久世城ノ内	京都府	1350年前後	1	?																				1	群象1	
小川城	静岡県	15c後半~16c前半																						2	※4 竜王の裏面は飛であるが、この駒は飛龍となっている・盲虎(飛鹿)1 どちらにも動き先を明示	
一乘谷朝倉氏館	福井県	1567年下限	1	○																				1	群象1・不明36・「王将」の墨書木札	
御着城	兵庫県	1571年下限																						2	※5 飛車の裏面か、龍王(裏面は飛鹿)か	
駿府城二ノ丸	静岡県	16c前半~17c前半																						1	反車1	
宮内堀跡	兵庫県	16c後半頃(1554年・天文23年以降)																						1	中将棋の駒 裏面は「豎行」	
合計			4	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	3	17	

- 不成 ? 未確認 ○ 確認

表2 中将棋・大将棋と考えられる将棋駒(16世紀以前)

全て八方桂の動きをし、「香車」相当の駒は全て飛車と同じ動きをする。「歩兵」相当の駒は日本の歩兵と同じ動きであるが、朝鮮の「兵」は前に1マス以外に左右に1マス動くことが出来る。

以上のことから、桂馬、香車は「馬」「車」の動きが縮小したものであり、玉将(王将)、歩兵は「王」「兵」の動きがそのまま伝えられたことが判る。金将は動き的には朝鮮の「士」の駒に近いものであり、銀将はインドの「象」、タイの「根」と同じ動きをしている。単なる駒の動きの比較であるが、日本の将棋はインドやタイの「将棋」とよく似ている⁽⁹⁾。また、日本以外は駒の動きが比較的似通ったものになっていると言える。

7. おわりに — 飛車・角行の元となった将棋駒 —

(1) 名称について

飛車については、「○車」は恐らく伝来将棋の中の「車」に相当する駒を日本風に置き換えたものと考えられる。「車」に相当する伝来将棋の駒は、縦横に動くことが出来たが、日本化に際しては香車という前方にのみ動くことが出来て、後戻りが出来ない駒に矮小化されている。

平安小将棋には、香車以外に「○車」という名称が付けられた駒は存在していない。しかし、ほぼ同じ時期に遊ばれていたと考えられる平安大将棋には奔車という駒が存在している。奔車は前後にどこまでも進むことができる駒であるが、「成る」ことはできない。現将棋の飛車の横の動きをなくしたもので、伝来将棋の「車」に相当する駒から横方向の動きを削除した動きになっている。この駒は香車の上に位置しているため、盤の両端に置かれている。左右に動くことが出来ず成ることもできないので、機能としては敵陣を突き破るだけの存在でしかない。

飛車という言葉は、12世紀前半頃に成立したと考えられる『今昔物語』の巻第一、「波瀬匿王、阿闍世王合戦語第二十九」に「我が飛車二相乗セテ仏ノ御許二……」とあり(今野達1999 81頁7行)、「飛車」とは「飛ぶように速い車」(今野1999 81頁 脚注16)という解釈がなされている⁽¹⁰⁾。つまり、飛車とは名前のごとく高速で動く車を意味し、そこから「車」の動きを重ね合わせた駒になったのではないか。

角行については、「○行」と呼称される駒は伝来将棋には存在しない。平安小将棋にも存在しないが平安大将棋には横行が存在し、左右に端まで動けるとともに前に1マス動くことが出来る。香車、奔車、横行などから推測すると平安時代には「車」は前後に、「行」は進む方向を表現して命名されていたものと考えられる。

因みに、中世に創作されたと考えられる大将棋、中将棋には、横行と対応する名称の豎行があり、この駒も名前の通り左右1マスずつと前後にはどこまでも進むことが出来る駒である。

角行の名称は飛車と異なり、駒の進む方向を表現しているものと考えられる。上半の「角」は斜めに行き来する状況を表し、下半の「行」は上半の方向に動いていくことを表しているものであろう。従って、角行は斜めに動き、横行は左右に(横に)動くことで駒の機能を分かりやすく表していると言える。つまり、飛車・角行の登場した将棋は、駒数の多い将棋ではあるが、初心者にも比較的容易にゲームに参加できるような名づけ方がされているのではないか。横行は玉将の上に位置し、左右に端まで動けるので守備駒として使うのに適していると考えられる。

(2) 動きについて

駒の動きについては前項で少し紹介したが、縦横の動きは分割されたままで、チェスのクイーンのように八方にどこまでも動くことのできる駒は存在していない。

縦横の動きに関しては、平安小将棋の香車が前に進むのみの1/2(動く方向から考えると1/4であるが、動くことのできるマス目の数から計算すると後戻りがきかない1/2とも言える)の範囲しか動くことが出来ず、平安大将棋の奔車は前後に動くのみの1/2の動き、横行は左右の動きに前1マスと「車」の動きを分割させている。その他、銅将は前後左右に1マス、注人は前後に1マス動くことが出来る駒である。

斜めの動きに関しては、平安小将棋には「将棋」の角行と同じ動きをする駒は見当たらないが、平安大将棋には「飛龍」が存在し、現将棋の角行と同じく斜め四隅にどこまでも進むことが出来る駒である。また、盤の端まで動くことはできないが、猛虎は四隅に1マスのみ動くことのできる駒として位置づけられる。

(3) 飛車・角行のもとになった駒

名称では、「○車」は香車と奔車、「○行」は横行が該当する。その他、飛龍が「飛○」のカテゴリーでくることが出来るかもしれない。飛車の名称に関しては、元々「車」に相当する駒が伝来将棋にあったと考えられるから、飛龍の「飛」と「車」を合わせて飛車という駒ができたとも考えられるが、『今昔物語集』に記載されている「飛車」から名付けられた可能性がより事実に近いのではないか。

角行に関しては横行が存在するのみで、「角○」の駒は存在していない。「行」に関しては、「みち」という意味と「古代の兵制」に関する意味合いがあり⁽¹¹⁾、兵士の列と斜めに動く「角」の意味から考え出された名前であろうか。

動きでは、上記の1マスしか動かない駒を除くと、奔車と横行を組み合わせれば飛車の動きになり、飛龍は単独で角行に置き換えることが出来る。飛車は大将棋で伝来将棋の形に戻ったともいえるが、13×13マス・駒数68枚の平安大将棋と15×15マス・駒数130枚の大将棋とでは、駒の数に2倍ほどの差異があり、それゆえ大きく動く駒が多数

誕生したのではないかと考えられる。ただし、多くなった駒のそれぞれの動きを覚える手間が増えるため、あまり流行しなかったのではないかとと思われる。

註

- (1) 日本に伝えられた将棋は、その当時の諸外国の将棋の形態が不明であることが多いため、ここでは現在の諸外国の将棋と比較しておく。
- (2) 平安将棋に続く将棋としては、大将棋と中将棋がある。大将棋の初出文献は『普通唱導集』の永仁5年～正安4年(1297～1302)なので、大将棋は少なくとも13世紀には成立していたと考えられる。
- (3) 因みに、平安大将棋は13世紀初頭に編纂された『二中歴』によって、以下の駒が見られる(国書刊行会1903)。平安小将棋と同じ駒(玉将・金将・銀将・桂馬・香車・歩兵)を除くと、銅将・鉄将・横行・猛虎・飛龍・奔車・注人の7種類である。
また、現在も遊ばれている中将棋は、延文、応安年間(1356～75年)に著わされた『異制庭訓往来』(群書類従刊成会編1893)の記述に寄るため、大将棋より50年～100年近く後出する可能性が考えられる。
- (4) 『二中歴』など平安時代の文書にある将棋には、酔象という名称の駒は存在しない(国書刊行会編1903)。
- (5) その理由について、古作氏は「遊戯性において優る部分か少なく、主流にならなかったから」(古作2014 147頁)と述べている。
- (6) 現在各国で行われている「将棋」に駒の呼称を日本語に当てはめた場合は概ね「王・将・象・馬・車・兵」となる(増川1977)。
- (7) 平安小将棋に比べて、盤面のマス目は線上を動く中国、朝鮮の将棋(9×10か)を除いては、盤面8×8であり、駒数も全て32枚である。つまり、日本の将棋と盤面のマス目の数や駒数において何ら遜色のない状態であるにもかかわらず、桂馬に匹敵する「馬」に相当する駒は、ほとんどが「八方桂」(八方へ桂馬の動きが出来る)であり、香車に匹敵する「車」に相当する駒は、ほとんどが飛車と同じ縦横に自由に動くことが出来るのである。そこには、日本の将棋が伝来当初にこの機能を受け入れることが出来なかった何等かの理由が存在したものと考えられる。
- (8) その他、角行に近い動きの駒を探してみるならば、中国将棋の銀将に相当する駒で、「相・象」という駒は斜めに2マス動くことのできる駒である。
- (9) 大内延行が最初に提唱した(大内延行1986)。現在では賛同者が多い。
- (10) 飛車については、「物語、伝説などで、風に乗じ空中を飛行するということ」(新村 出1991)という意味があるようである。
- (11) 「行」の意味については、「みち(道路)」の意味と共に、「古代の兵制(25人組の称)」(簡野道明1923)という意味もあるようである。従って、横行の「行」は道であり、兵士25人分の力を持った駒であるともとれる。

文献 (著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

・雑誌

日本経済新聞ほか (2013) 10月24日付

・書籍、報告書

大内延介(1986)『将棋の来た道』タイ編1・2 めこん
簡野道明 (1923)『増補 字源』角川書店

群書類従刊成会編 (1893)『異制庭訓往来』群書類従
小泉信吾 (1987)「出土駒からみた将棋の発生」『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
国書刊行会編 (1903) 三善為康『二中歴』史籍集覧
古作 登 (2014)『平安時代の「酔象」駒発見から日本将棋の進化過程を推測する』—将棋は仏教寺院で仏典を参考に改良が進められた—大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要16
古作 登 (2015)『最古期の日本将棋「平安将棋」から「平安大将棋」、「大将棋」への進化に関する考察』大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要17
今野 達 校注 (1999) 新日本古典文学大系『今昔物語集』一 岩波書店
新村出編 (1991)『広辞苑』第四版 岩波書店
清水康二 (1994)『興福寺旧境内発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所
増川宏一 (1977)『将棋 I』ものと人間の文化史23法政大学出版
三宅 弘(2013)「将棋史研究ノート(6)」銀将の存在『紀要 第26号』公益財団法人滋賀県文化財保護協会
三宅 弘 (2016)「将棋史研究ノート (7)」—桂馬と香車の動きと性格—『紀要』29. 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
村山修一 (2006)『普通唱導集 翻刻・解説』法蔵館
増補史料大成刊行会編(1965)源師時『長秋記』増補史料大成 臨川書店
増補史料大成刊行会編 (1992) 藤原頼長『台記』増補史料大成 哲学書院

・出土駒の出典

◆飛車

- 1 飛車(龍王) 木簡学会1997(観音寺城下町遺跡『木簡研究』第19号) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2000(ほ場整備事業関係遺跡発掘調査報告書27-3『観音寺城下町遺跡』)
- 2 飛車(龍王) 福井県教育委員会1979(『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I—朝倉遺跡の調査—)
- 3 飛車(龍王) 滋賀県教育委員会2000(『延暦寺木活字関係資料調査報告』)
- 4 飛車(龍王) 木簡学会2000(大坂城跡『木簡研究』第22号)

◆角行

- 5 角行力(龍馬のみ。他面は不明) 木簡学会2005(堅田B遺跡『木簡研究』第27号)
- 6 角行(裏不明) 木簡学会2010(神鳥屋曲輪跡『木簡研究』第32号)
- 7 角行(龍馬) 木簡学会1996(塩田城跡『木簡研究』第18号)
小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 8 角行(龍馬) 福井県教育委員会1979(『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I—朝倉遺跡の調査—)
- 9 角行(龍馬) 木簡学会2009(亀ヶ崎城跡『木簡研究』第31号) 山形県埋蔵文化財センター 2009(『亀ヶ崎城跡第四・五次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 180)
- 10 角行(龍馬) 小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

◆酔象

- 11 酔象(不明) 日本経済新聞ほか2013
- 12 酔象(太子力) 福井県教育委員会1979(『特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I—朝倉遺跡の調査—)

◆奔王

13 奔王(本横)(裏はナシ) 木簡学会2010(川西遺跡『木簡研究』第33号)

◆鳳凰

14 鳳凰(奔王) 木簡学会1986(鶴岡八幡宮遺跡『木簡研究』第8号)
小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

◆龍王

15 龍王(飛龍) 木簡学会1987(小川城跡『木簡研究』第6号) 小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

16 龍王(不明) 木簡学会(御着城) 小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

◆盲虎

17 盲虎(飛鹿) 木簡学会1987(小川城跡『木簡研究』第6号)
小泉信吾1987(「駒の出土例とその意義」『京都府埋蔵文化財論集』第1集—創立5周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター)

◆金将

18 金将(飛車) 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 (1984)『増補 改編 鳥羽離宮跡 1984』

◆銀将

19 銀将(豎行) 木簡学会2000(宮内堀脇遺跡『木簡研究』第22号)

◆中兵

20 中兵(不明) 木簡学会1995(平安京跡左京八条三坊十町『木簡研究』第17号)

A 飛龍(飛龍) 木簡学会2003(志羅山遺跡『木簡研究』第25号)

(みやけ ひろし：保存活用課 主任技師)

平成30年（2018年）3月31日

紀 要 第 31 号

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会
520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2
(TEL) 077-548-9780 / (FAX)077-543-1525
e-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：マルキ印刷株式会社